

〈資料紹介〉 田中英光の戦中・戦後

——戦地からの書簡と「肉体だけが人間ではない。」自筆原稿をめぐって——

田 中 励 儀

芥川賞作家西村賢太氏の編集で、新しく田中英光の文庫本『田中英光傑作選』（平成27・11・25、角川書店）が刊行された。青春小説と扱われることが多い初期の代表作「オリンポスの果実」（「文学界」昭和15・9）、戦後の党活動時代の失望を描いた「風はいつも

吹いている」（「文芸大学」昭和23・2）、師と仰ぐ太宰治への想いを綴った「生命の果実」（「別冊文芸春秋」昭和24・8）、デカダン時代の苦悩を告白した「野狐」（「知識人」昭和24・5）、「離魂」

（「新小説」昭和24・8）、「さようなら」（「個性」昭和24・11）、以上、六作品が選ばれている。戦後の混乱期に簇生したカストリ雑誌に大量の作品を発表した田中英光の場合、誤植・誤記が頻繁に見られるので、読解に際して常に本文の問題が付きまとう。西村氏が

「解題」で述べるように、今回、改めて厳密な校訂が施されたことは特筆すべきである。とりわけ、「生命の果実」は自筆原稿に基づ

〈資料紹介〉 田中英光の戦中・戦後

いた〈新しい本文〉であり、今後の研究ではこの文庫本を底本としなければならぬ。

自筆資料の重要性を踏まえて、田中英光の書簡一通、随筆原稿一点を紹介する。

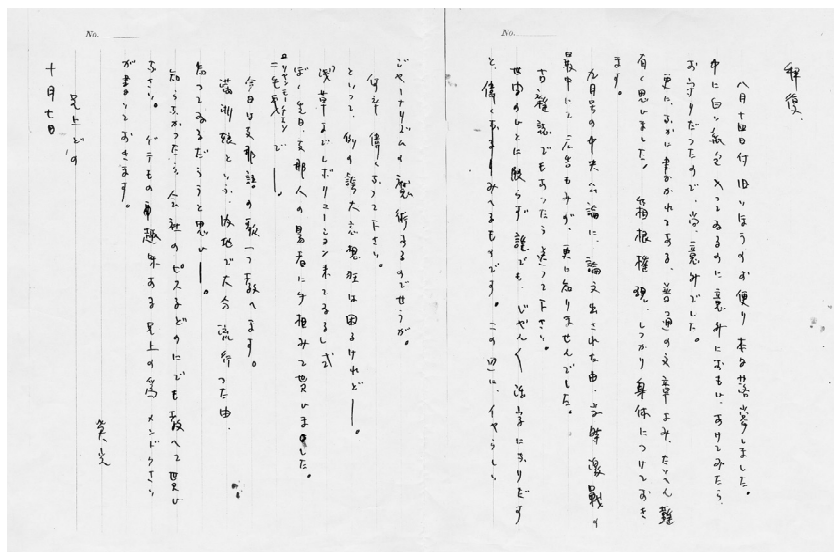
【A】 田中英光書簡

昭和十四年（推定）十二月十二日

北支派遣牛島部隊気付真野部隊在明隊 田中英光より 東京市
世田ヶ谷区東玉川町四 岩崎英恭宛（軍事郵便、封書、便箋三枚）

拝復

八月十四日付旧いほうのお便り本日落掌しました。中に白い紙包入つてゐるのに意外におもひ、あけてみたら、お守りだったので、



【A】 岩崎英恭宛田中英光書簡

尚、意外でした。

更に、なかに書かれてある、普通の文章よみ、たいへん難有く思ひました。箱根権現、しつかり身体につけておきます。

九月号の中央公論に、論文出された由、当時激戦の最中にて広告もみず、更に知りませんでした。

古雑誌でもあつたら送つて下さい。

世間のひとに限らず誰でも、じゃんく活字になりだすと、偉くみへるものです。この辺に、イヤらしいジャーナリズムの魔術あるのでせうが。

何卒、偉くなつて下さい。

といつて、例の誇大妄想狂は困るけれど――。

「浅草までレポリューション来てゐる」式

ばく先日、支那人の易者に手相みて貰ひました。

リヤモーター
二毛 銭――。

今日は支那語の歌一つ教へます。

満洲娘といふ、内地で大分流行つた由、

知つてゐるだらうと思ひ――。

知らなかつたら、会社のピス子どのにでも教へて貰ひなさい。ゲテもの趣味ある兄上の為メンドクさいが書いておきます。

英光

兄上どの

十月七日

満洲娘

ワキアシイリユウ マンチウニヤン
我的十六 満洲娘

チュンサンユエ シェーカイヂー
春季三月 雪解的

イシチュンホア アリヤア
迎春花 開了

オユイケン リセンリヨウ
出嫁 隣丁 村家

タイリヤウ ワンシヤツン
待了 王先生

宛先の岩崎英恭は、英光より十一歳年上の兄で長男。封筒の表面には「軍事郵便」のゴム印が捺され、郵便切手の貼付や消印の捺印はない。裏面に「12/12」の書き込みがあることから、十二月十二日の発信と判断した。ただし、書簡本文末尾には「十月七日」と記されているので、執筆から発信までの間に二ヶ月の空白がある。これには戦地の事情が反映していよう。林清司編「田中英光年譜」〔田中英光全集〕第11巻所収、四四九頁～四五二頁、昭和40・12・20、芳賀書店〕によれば、英光の応召は、(1)昭和十二年七月十六日～十二月十三日、(2)昭和十三年七月一日～昭和十五年一月五日の二回が確認できる。二回目の応召では中国山西省に駐留し掃

討作戦に参加するが、途中、昭和十三年十二月二十五日～昭和十四年二月の陸軍野戦病院入院を挟む。

この書簡に執筆年は記されていない。しかし、英光が「九月号の中央公論に、論文出された由」と言う兄英恭の「論文」が、「中央公論」第五十四年第九号(昭和14・9)に掲載された「長期建設財政の諸問題」を指すことから、昭和十四年の発信と推定した。林清司編「田中英光年譜」では「十月一日、兄英恭の著作『長期建設と日本の財政』を受け取る。」とするが、根拠は不明。この書簡に「当時激戦の最中にて広告もみず、更に知りませんでした。古雑誌でもあつたら送つて下さい。」と記されているように、十月七日の時点で英光は入手していない。また、林清司氏が英恭の論文を単行本のように扱ったり、『長期建設と日本の財政』と題名を不正確に記しているところも訂正を要する。

昭和十四年七月～九月、英光は潞安作戦に参加していたようで、激戦の最中ゆえ広告も見なかったというのも事実だろう。なお、林清司編「田中英光年譜」からは昭和十四年十二月における英光の所属が「南雲部隊藤村部隊北川隊」と読めるが、この書簡には、「牛島部隊気付真野部隊在明隊」と記されており、再考を要する。「田中英光年譜」で昭和十三年七月～昭和十四年三月の所属とされる「牛島部隊気付真野部隊在明隊」に復帰したのだろうか。

この書簡は、戦地における英光の動静を窺わせ伝記資料としての価値を持つが、同時に、およそ半年前に太宰治の斡旋で小説「鍋鶴」を初めて商業雑誌「若草」第十五巻第五号（昭和14・5）に掲載されることを得た、数え二十七歳の作家志望の青年が醸し出す初々しい心情が読み取れる。冒頭、内地の兄英恭から送られた慰問文と、同封されていた箱根権現のお守りへの謝礼が述べられる。芦ノ湖畔に鎮座する箱根神社は、古来、箱根権現と称され、源頼朝が崇敬したことで知られる。おそらく、武運長久の願いが込められたお守りだったろう。

次いで、英光は兄英恭が著した経済論文「長期建設財政の諸問題」に言及。蠟山政道・原田鋼・八木澤善次の所論と並び、「中央公論」の「編輯後記」で「それ／＼喫緊の課題を提へて堂々の論陣、何れも当面必読の透徹せる論文である。」と謳われた十頁に亘る論文には、軍備拡充の要請や生産力拡充・大陸建設の国策が持ち込まれた日本財政の将来を占った提言が記されている。しかし、英光は読んでいないので、その内容を付度してもあまり意味はない。英光は「若草」よりもメジャーな「中央公論」に論文が掲載された兄英恭に対していくらかの嫉妬を覚えたようで、「イヤらしいジャーナリズムの魔術」を批判したうえで、「何卒、偉くなつて下さい。」と含みのある言葉を贈っている。

最後に便箋を改めて、英光が中国語の歌詞を書き送った「満洲娘」は、昭和十三年十一月、テイチクレコードから発売されて大ヒットした、石松秋二作詞・鈴木哲夫作曲・服部富子歌唱の「満洲娘」を指す。

私十六 満洲娘

春よ三月 雪解けに

インチユンホワ
迎春花が 咲いたなら

お嫁に行きます 隣村

マツ
王さん 待ってて 頂戴不

当時、満洲で生活していた石松秋二が作詞した歌謡曲で、中国語でも流行したのだろうか。帝国大学を卒業して東洋経済新報社に入社した兄英恭の堅物ぶりを嗤い、この歌を知らなかったら「会社のピス子どの」つまり〈タイピスト嬢〉に教えてもらいなさいと、親しみを込めて書き送ったところに、兄弟の隔ての無さが窺えて、微笑ましい。

【B】 田中英光随筆原稿

肉体だけが人間ではない。

田中英光

近頃のぼくは、全ての流行作家に焼餅をやいている。だから「群



【B】「肉体だけが人間ではない。」自筆原稿

像（五月号）に、「肉体が人間である」という「作家の眼」を書かれた、田村泰次郎氏をもヤイている。けれども、焼餅はイヤらしい感情なので、ぼくはそれを殺すことに努力したい。その為にも、この一文を書く。ぼくはあの一文を読んで、田村氏を誠実なひとだと思った。逆説とか皮肉ではない。田村氏のいはれている事は殆んど一面では真実と思つた。世の中に、絶対の真理というものは、いつも相対的にしか、存在していない。しかし、田村氏は一面の真実を、まるで絶対真理のように叫んでおられると思つた。ちやうど、田村氏の作品に、思想がないといった、少し軽率な批評家の言葉を、裏返ししたように。ぼくも昔、拙作「オリンポスの果実」に思想がないと、武リンさんから公評されて、ずいぶん、ムクれた思い出がある。どんな人間にだつて、理性があるように、どんな作品にだつて、思想はある。例えば、「丹下左膳」にだつて、低俗な虚無主義と、商業主義のゴツタ煮みたいな思想があつた。人間にも、ニユウトンや、レエニンのような理性から、小平義雄、東條英機のような理性まで、色々な理性があるように、どんな作品にも、思想がある。人間の歩いてゆく方向にプラスになる思想もあれば、マイナスになる思想もある。それにだつて、借物も、贖物も、本物もある。作品から、浮上つているのもあれば、離れているのも、なかに沈みこんでいるのも、營養失調のものも、病氣のものも、不具のものもある。

そして、それを作品の肉体と切離して論じることには無駄だ。作品の思想はつねに、作品の肉体を中心とした存在だからだ。それ故、丹羽氏や田村氏が、どんなに、思想を嫌はれ、無視されても、両氏に嫌はれ、一寸いぢけた、營養不良な思想が、両氏の見事な、作品のなかに、ちょうど、海水の塩みたいに溶けこんでいる。田村氏は、「人間らしい人間にならなければいけない。」という美しい、自分の思想をもつておられる。「そのためには、人間を構成する基本的條件である肉体を自由に解放し、これまでの肉体をしぼっていた、いろんな制約を解いて、赤ん坊のように自然に呼吸づかせ、それを探求しなければならぬ。」という、ちよつと、十九世紀の思想家たちに似た、云い古された、幼ない立派な思想も、ちゃんと自分のものとして持つておられる。ばくは右の田村氏の御意見にとても賛成だ。けれども、田村氏に、その肉体の解放をどういう風にして、やられるかを、お聞きしたい。人間の肉体も社会のなかで生きている。社会の解放なしに、肉体の解放が可能だろうか。いまの大ヤミの社会だつて、田村氏が出征しておられた時の社会に比べれば、新憲法の象徴するものだけ、一步、前進していると思う。それだから、田村氏も、「肉体の悪魔」や「肉体の門」のような、ともかく、肉体解放思想の、のびのびした小説も、発表できたことと思う。これが、戦争中の日本の社会だつたら、まるで出来なかつた事に違いない。

だから、ばくは田村氏にお聞きする。肉体の解放のためには、社会の解放が必要ではないでしょうか。ばくは今の日本の人たちが、なんでも、もの、一面しか、それも安易な一面、享樂できる一面しかみない事がかなしい。田村氏の罵る、日本の思想家たちは、たしか、作品の肉体を軽視していたのが間違いだ。ばくも、作品では、思想よりも、肉体が優位であり、規定性があると思う。ちよつと、存在と意識の関係でも分るように。けれども、田村氏のように、思想をまるで無視しておられるのも間違いだ。むろん、ばくのいうのは、肉体化された思想という意味です。それでないと、肉体の解放がたゞ性器の解放になり、そのまゝに田村氏はじめ、ある批評家、編輯者たちが、土下座して、女陰を拝むという珍風景になりかねない。

四〇〇字詰原稿用紙四枚。ペン書きの原稿で、他筆による書き込みや編集作業に関わる指示・押印などは、一切見られない。現在のところ発表紙誌を確認できず、未発表原稿の可能性が高い。雑誌「群像」第二巻第五号（昭和22・5）の「作家の眼」欄に掲載された、田村泰次郎「肉体が人間である」への反論に終始していることから、執筆時は昭和二十二年後半と推測される。

英光のターゲットにされた三頁半に亘る田村泰次郎の随筆「肉体

が人間である」は、「近代の日本人の「思想」といふものの考へ方」を再考したものである。自作「肉体の悪魔」について、ある批評家から「この作品には思想がない」と批判された田村は、「私は自分の肉体をどこまでも追求することで、思想を探索することが出来ると思つてゐる」と反論する。

私はこの戦争の期間を通じて、肉体を忘れた「思想」が、正常の軌道を踏みはづしたやうな民族の動きに対して、なんの抑制も、抵抗もなし得なかつたのを見た。また長い野戦の生活で、私はもつともらしい「思想」や、えらさうな「思想」をかかげてゐる日本人が、獣になるのを体験した。私もその獣の一匹であつた。

と、自身の痛切な戦争体験を拠り所とし、「敗戦によつて、日本人の自信や、いままで持つてゐた「思想」は、いちどきに崩れ去つてしまつた。」と、田村は「肉体を基盤としない「思想」の（中略）脆さ」を嘆く。それなのに、敗戦後の日本では「また独断にみちた太平洋楽をならべたてようとしてゐる」輩が出現しているというのである。

私はこんな時代に混乱しないやうな「思想」を、思想とは思はない。こんな時代に論理的にものをいふ人間を信用しない。深夜、ひそかに敗戦の悲惨を嘯みしめ、みづからの肉体をひき裂

き、心臓をつかみだして、壁に叩きつけた寂しさと、かなしさに号泣しないやうな魂を、私は絶対に信用しない。

そして、「七年にわたる銃火の生活」に裏打ちされた「三十七歳の私の肉体」が体得した、「肉体の意味を知ることとは、人間の意味を知ることだ」というテーゼは、エロを取締まろうとする内務省の方針に対する反発へと展開する。

私は役人がエロを取締るのは絶対反対だ。そんなものは人民にまかせて置くべきだ。人民の肉体が解決する問題である。

（中略）エロなどといふものを包容して、尚余裕綽々たる肉体を、日本人が是非持たなければならぬ。そして、その肉体を基盤として、その上に壮大堅牢な人間性をつくりあげなければならぬ。

「とにかく、私たちは人間らしい人間にならなければいけない」と主張する田村は、「お互ひにもう猫をかぶり、ウソをつくのはやめよう」と、繰り返し「肉体の解放」を唱える。田村泰次郎の随筆「肉体が人間である」は、「敗戦国の小説家らしく、私は激動する現実の波浪のなかに謙虚に脅え、みづからもまた激動しつづきたい。」と結ばれる。

この田村泰次郎の随筆に敏感に反応した、田中英光の随筆「肉体だけが人間ではない。」は、「どんな人間にだつて、理性があるよう

に、どんな作品にだつて、思想はある。」と、素朴な感想を漏らしている。敗戦後の英光は、昭和二十一年三月、「第二次世界大戦の見透しを正しくなし得た共產主義の美しさに再び心ひかれ」（「地下室から」『季刊芸術』昭和23・5）入党、沼津地区委員長となり、食糧危機突破対策・隠匿物資摘発などに活躍した。しかし、沼津機関区で支援に励んだ九・一五国鉄ゼネストがマッカーサー総司令部の中止命令によつて挫折したところから活動に行き詰まりを感じ始め、新日本文学会で中野重治と交わした論争に敗北感を持ったことなどから急速に情熱を失った。「主義は信じられるが、人間は信じられない」（「風はいつも吹いている」）として、昭和二十二年四月、正式に離党する。

随筆「肉体だけが人間ではない。」が記されたと考えられる昭和二十二年後半は、離党後の英光が〈主義〉への信頼を捨てきれない時期と位置づけられる。「全てか、然らずんば無か、私のこうした極端な気持が一度、共産党と喧嘩すると、今度は淫売婦のふところに飛びこませた」（「野狐」）。英光がデカダン小説に転身する契機となる山崎敬子との出会いが同年十月下旬とされていることを考慮すれば、執筆時期を昭和二十二年六月から九月の間の比較的早い時期に絞ることができよう。「肉体だけが人間ではない。」は、〈文学の思想性〉への信頼と、〈肉体文学の流行作家〉田村泰次郎へのこた

わりとが輻輳していることから、党時代からデカダン時代へ移行する英光の微妙な感覚が現わされた随筆としての意味を持つ。

田村の「肉体が人間である」との主張は、痛切な戦争体験に基づいて形成されたがゆえにやや声高に叫ばれた嫌いがあり、それを「一面の真実を、まるで絶対真理のように叫んでおられる」と受け取った英光は、「どんな作品にも、思想がある。」と反論する。もっとも、作品の思想や人間の理性として例示されるのが、「丹下左膳」の「低俗な虚無主義と、商業主義のゴツ煮みたいな思想」であったり、敗戦前後の連続強姦殺人犯小平義雄や太平洋戦争の推進者東條英機の「理性」であつたりし、〈思想と肉体は切り離せない〉という常識的な感慨を述べるに留まっている。また、戦後の日本社会を「新憲法の象徴するものだけ、一步、前進していると思う。」と認める英光は、「肉体の解放のためには、社会の解放が必要」とするなど、社会改革を諦めてはいない。「性器の解放」に相對する「肉体化された思想」を希求して擱筆されるところにも、党時代に抱いていた〈主義への信頼〉の残り香を嗅ぐことができる。

田村泰次郎と田中英光の年齢差は二歳。本人の言によれば田村は七年間、英光は二年間の応召。山西省への従軍という共通項を持ちながらも、ふたりの戦後認識は異なる。実戦体験を根底に据えた作家の、文学に対する考えの隔たりが興味深い。なお、自筆原稿の推

敵は少ないが、英光が田村の信念に与えた「十九世紀の思想家たちに似た、云い古された、幼ない立派な思想」という批評のうち、「立派な」は行間に加筆挿入された形容詞であった。「幼ない」と「立派な」、この矛盾した表現には、妙に遠慮した英光の気弱さが反映されているように感じられる。「武リンさん」は武田麟太郎を、「丹羽氏」は丹羽文雄を指すことはいうまでもない。

流行作家田村泰次郎へのこだわりという点では、英光は「近頃のぼくは、(中略) 田村泰次郎氏をもヤイている。」と正直に告白している。この「焼餅」は、デカダン時代へ移行してからいっそうはなはだしくなり、カストリ雑誌に発表された諸作品では田村を揶揄した人物を登場させることになる。

例えば、「共稼ぎの季節」(「ラッキー」昭和24・10)。

——ある商事会社勤めるサラリーマン池田大介君は、防空壕で知り合った妻千代子さんと、敗戦の翌年に生まれた四歳になる娘美智子嬢とともに、一家三人で幸福に暮らしていた。しかし、インフレが進み、生活は苦しくなる一方である。そこで、千代子さんは全身貞操帯のごとき下着に身を包み、西銀座の社交喫茶で働き始める。女手ひとつで愛児を育てる健気な戦争未亡人を装って固定客を獲得し、着実に収入を増やすが、ある時、事件が起こった。

当今流行の肉体文学者・田中作次郎先生が千代子さんを見染め、

創作のインスピレーションを得るために、側に居てほしいと申し出たのである。誘われるままについていった「桃色ホテル」の一室で、「ロマンチストから、フオビストに変化した」先生は、「日本の文化の為に、あなたの肉体を、ぼくに捧げて下さい。」と、大ゲサで怪しげな言葉を吐いて迫ってくる。暴に対しては暴を以て酬いヨ。千代子さんは先生の股間を力一杯蹴り上げて、あとも見ずに帰ってきた。そして、大介君は毎晩、千代子さんの肉体を自分だけが楽しむ権利を、溢れるような喜びとともに保有しているのだ。――

あるいは、「肉慾の果て――狂人の手記」(「X」昭和24・8)

——東京近くにある国立G病院に、偏執病パラノイアという病名で収容されている「ボク」の手記。「ボク」の母は、父の淫行の故に離縁状もなしに棄てられて発狂し、自殺した。目が覚めた父は娼婦と別れ、「ボク」を溺愛しはじめるが、その影響か、「ボク」は「母を含めて女性一般が嫌い」になる。数年後、その父も娼婦と縋りを戻し、家を出た。性欲への嫌悪から、「ボク」は「結婚という、人間にとり、この上なく不安で不潔な惨害を、根本からぬき去ろう」という〈大望〉を抱く。

そして、男性たちを「去勢」し、女性たちには「かの不潔な交接なくとも、未来永久にわたり、その子孫を期待しうる」「精虫注射療法」なるものを構想し、原爆投下後の日市で完成させる。「ボク」

は手始めに、「神秘の霊薬」を懐にして肉体文学の大家・船田泰一先生の宅を訪れた。船田の自我・色欲中心の妄説が、いかに満天下の子女を惑わせ、墮落させているか、憤った「ボク」は例の注射器を取り出し、船田めがけて一躍した。しかし、書生にねじ伏せられ警察に引き渡される。そこで狂人と断定され、精神病院に送られてきたのであった。――

「共稼ぎの季節」（全集未収録作品）は編集者の手によって「風刺」の角書きが冠せられたユーモア小説。英光は、敗戦後の日本で流行している「共稼ぎ」は、女性の権利が認められたのではなく、「女性の肉体の魅力が、男性より強いという単純素朴な結果らしい。」と看破している。また、明らかに田村泰次郎を諷して名付けられた「肉体文学者・田中作次郎先生」の戯画化からは、英光の嫉妬と対抗意識が窺われる。

「肉慾の果て―狂人の手記―」（全集未収録作品）は、昭和二十四年四月から五月にかけて戸塚精神病院に入院した際の経験に基づいた手記形式の作品。催眠薬中毒治療のための入院だったが、作中には「精虫注射療法」なる奇妙な〈薬物幻想〉がみられる。「ボク」の攻撃対象に、やはり田村泰次郎を諷して名付けられた「肉体文学の大家・船田泰一先生」が選ばれていることから、常に英光が対抗意識を先鋭化させていたことは明らかである。

他にも、カストリ雑誌界の内情を諷した「紅×物語―現代のシンデレラー―」（『旅と読物』昭和23・7。全集未収録作品）では、「白き淫獣」「肉体の門」といった千篇一律の内容を〈時代物〉と〈現代物〉に書き分けた文例が示されるなど、田村の作家活動に対する英光の批判的な関心は高い。田村の方は、生涯を通じて英光に対抗意識を抱いていた形跡は乏しく、英光の過剰な反応との印象が残るが、「肉体だけが人間ではない。」は、風刺的な姿勢ではなく、正面から田村泰次郎の所説に対峙した英光の評論としての価値を持つ。

戦後における田中英光や田村泰次郎の文学や考え方は、実戦に従事した戦争体験から生まれている。その意味で、今回紹介したふたつの自筆資料は、田中英光の戦中・戦後を論じる際に一定の役割を果たすだろう。